

石川のものづくり 開発秘話

丸井織物株式会社

丸井織物は、織物とITの融合によって新たな価値を創造するテキスタイルメーカーである。「テキスタイルスタジオ」に展示される約4万5千点の生地サンプルのデータは国内最大規模。スポーツウェア用の織物生産で国内屈指の生産量を誇り、自動車や食品、炭素繊維など産業用テキスタイルも手掛ける。LINEスタンプなど新しいビジネスにも挑戦する。



丸井織物株式会社

鹿島郡中能登町久乃木井部15
TEL0767-76-1337㈹ FAX0767-76-0304
<http://www.maruig.co.jp/>
丸井グループ／丸井織物㈱

宮米織物㈱ 良川サイジング㈱
中国:丸井織物(南通)有限公司



トウモロコシを使った生分解性の糸で織られた「茶袋」。ヨーロッパのティー文化に受け入れられ、「おいしい」と評判を呼び、輸出が伸びている。均一の間隔で織るのが非常に難しく、テキスタイルの可能性を広げる技術が詰まっている。

2002年、年末も差し迫ったクリスマスのことだった。産業用テキスタイルの開発を任せていた飯川浩平さんのもとに京都の飲料フィルターメーカーから「茶袋」生産の打診があった。糸の原料に指定されたのは当時、環境に優しいとして話題を集めていたトウモロコシ。「食品分野は初めてだったので戸惑った」という飯川さんの10年以上にわたる戦いは、ここから始まった。

一般的な茶袋には、織られていない布や紙が使われている。しかし、織った茶袋は、茶葉がしっかりと確認できるほど透明であり、

均一な織り目から抽出されるお茶は雑味がない。紙の茶袋と比べると10~20倍の値がつく高級品だった。この茶袋に大きな可能性を感じた飯川さんだったが、その道のりは決して平坦ではなかった。

トウモロコシの糸は摩擦に弱く、伸ばすと元に戻りにくい。この欠点は織る上で大きな障害となった。通常、織機の糸が切れる頻度は5日に1度ほどである。だが、トウモロコシの糸は強度がなく1日に3~4回切れたため、飯川さんは織機につきつきりだった。トラブル続きの織機は当時、社内で「飯川台」と呼ばれたという。

「チャレンジを後押しする社風、不斬の努力で事業を成功に」



なかなか安定しない茶袋の生産を「やめた方がいい」という声は社内でも多かった。くじけそうになるたびに飯川さんの支えになつたのは「とことんやってみろ」

という上司の言葉だった。不断の努力で糸や生産技術を改良した結果、2014年には茶袋の織りから精練までの一貫生産が可能になり、新工場が整備された。茶袋事業は今、会社の収益の大きな柱となっている。



「お客様と共同で新しい技術を生み出し、win-winの関係を築きたい」と語る飯川浩平氏

「茶袋で培った技術は、他の商品にも転用できる。結果が出るまで見守ってくれた会社に感謝したい」と飯川さん。そのまなざしはすでに次の新たな商品開発を見据えている。